Japanese Association of Educational Psychology

教育心理学研究, 2003, 51, 13—21

幼児の関係性攻撃と社会的スキル

磯部美良[1]　佐藤正二[2]

本研究の主な目的は，関係性攻撃を顕著に示す幼児の社会的スキルの特徴を明らかにすることであった。年中児と年長児の計362名の攻撃行動と社会的スキルについて，教師評定を用いて査定した。関係性攻撃得点と身体的攻撃得点によって，関係性攻撃群，身体的攻撃群，両高群，両低群の4つの群を選出した。社会的スキルについて群間比較を行った結果，両低群に比べて，関係性攻撃を高く示す子ども(関係性攻撃群と両高群)は，規律性スキルに欠けるものの，この他の社会的スキル(友情形成スキルと主張性スキル)については比較的優れていることが明らかになった。また，関係性攻撃群は，教師に対して良好な社会的スキルを用いていることが示された。さらに，関係性攻撃群の男児は友情形成スキルが全般的に優れているのに対して，関係性攻撃群の女児は友情形成スキルが一部欠けていることが見出された。これらの結果から，関係性攻撃の低減には，規律性スキルの習得を目指した社会的スキル訓練が効果的であることなどが示唆された。

キーワード：関係性攻撃，社会的スキル，幼児

問　題

仲間から拒否される子どもの目立った特徴の一つである攻撃行動は，これまで多くの研究の対象となってきた。これらの研究を概観すると，男子のみを調査対象としているものや，攻撃行動を身体的，言語的なものに限定して検討しているものが多い(Coie & Dodge, 1998)。これは，攻撃行動が男子によく現れる問題であると考えられていたためである(Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990)。

ところが，女子の攻撃性に着目した研究者らによって，このような考え方とは一致しない結果が報告されている(Cairns, Cairns, Neckerman, Ferguson, & Gariépy, 1989 ; Crick & Grotpeter, 1995 ; Feshbach, 1969 ; Galen & Underwood, 1997 ; Lagerspetz, Björkqvist, & Peltonen, 1988)。例えば，Lagerspetz et al. (1988) は，自己評定法と仲間評定法を用いて，小学5年生の男女の攻撃行動を査定した。その結果，男子は叩く，蹴るといった攻撃行動を多く示すのに対し，女子は仲間はずれや無視といった攻撃行動を多く示した。また，Cairns et al.(1989)の小学4年生から中学3年生までの6年にわたる縦断的研究によれば，男子は同性との葛藤場面において一貫して身体的攻撃を多く示した。それに対し，女子は学年が上がるにつれて，敵対している子どもをグループから締め出したり悪い噂を流したりするといった攻撃行動を相対的に多く示すようになった。上記の研究はいずれも，攻撃行動には性差があること，そして女子の攻撃行動は他の子どもを排除したり無視したりするなどの形態をとる傾向があることを明らかにしている。

Crick とその共同研究者は，このような攻撃形態を関係性攻撃(relational aggression)と命名し，関係性攻撃を「仲間関係を操作することによって相手に危害を加えることを意図した攻撃行動」(Crick & Grotpeter, 1995)と定義している。そして，関係性攻撃を示す子どもの適応状態や行動的・認知的特徴の検討を体系的に進めている。例えば Crick & Grotpeter (1995) は，関係性攻撃を示す児童には，抑うつ感や孤独感(女子)が高いことを報告している。また，Crick(1997)は，関係性攻撃を示す児童には，不安や低い自尊心など内面化問題が高いだけでなく，衝動性や他者への配慮の欠如などといった外面化問題も高いことを見出している。さらに Crick & Grotpeter (1995) や Crick, Casas, & Mosher (1997) は，関係性攻撃を示す幼児や児童ほど，仲間から拒否されていることを実証している。これら Crick らの一連の研究から明らかなように，関係性攻撃を示す子どもは適応上の様々な問題を抱えていると言える。したがって，関係性攻撃によるネガティブな結果を持続させないようにするためには，攻撃の程度が穏やかで，介入への応答性も比較的高い幼児期のうちに介入指導を行い，関係性攻撃を低減させることが重要であると考えられる。

1　広島大学大学院教育学研究科　isobe_miyoshi@hotmail.com
2　宮崎大学教育文化学部

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

さて，攻撃行動を改善するための試みの一つに，社会的スキル訓練がある。社会的スキル訓練では，攻撃行動を単に低減させるばかりでなく，それに代わる適切な社会的スキルを習得させようとする。そのため訓練を実施する際は，対象となる子どもに欠如している社会的スキルを識別しておくことが必須となる（佐藤・佐藤・高山, 1993）。したがって，関係性攻撃を示す幼児を対象に社会的スキル訓練を試みる場合には，彼らに特有な社会的スキルの欠如が見られるのかどうか，見られるとすればどのような社会的スキルに問題を抱えているのかを実証しておく必要がある。しかし，関係性攻撃を示す幼児に不足する特有な社会的スキルを明らかにした研究はほとんど報告されていないのが現状である。

Crick et al.（1997）は，幼児の関係性攻撃と向社会的行動（本研究で取り上げる社会的スキルの一部に相当）との間には，身体的攻撃[3]と向社会的行動との間と同様に，有意な負の相関があることを見出している。この研究は，関係性攻撃を顕著に示す幼児ほど，社会的スキルが不足している可能性を示唆する数少ない研究の一つである。しかし，彼らの研究には次のような問題点がある。第1に，相関研究であるため，関係性攻撃を顕著に示す子どもと他の攻撃（例えば身体的攻撃）を顕著に示す子どもとの違いを明確にできない。第2に，彼らの用いた向社会的行動尺度は1因子（「分け合ったり順番を守ったりすることができる」，「仲間にやさしく接する」，「友達にいいことを言う」，「仲間を助ける」の4項目）であることから，関係性攻撃を顕著に示す幼児の行動特徴を多元的に捉えているとは言えない。

そこで本研究では，これらの問題点を以下の2つの手続きによって改善し，関係性攻撃を顕著に示す幼児の社会的スキルの特徴を明らかにすることを第1目的とする。第1に，関係性攻撃の高低と身体的攻撃の高低を組み合わせて4つの群を設定し，それら4群間の比較を通して，関係性攻撃を顕著に示す幼児の社会的スキルの特徴を浮き彫りにする。第2の改善点は，渡邊・岡安・佐藤（1999）によって作成された幼児版教師評定社会的スキル尺度を用いることである。この尺度は，従来，幼児に対する社会的スキル訓練において訓練対象児のスクリーニングや効果査定のために使用されており，幼児の社会的スキルを詳細かつ多面的に捉えることができるという利点がある。

[3] Crick et al.（1997）は，主に身体的攻撃とその脅しから成る下位尺度を「外顕的攻撃（overt aggression）」と命名しているが，本研究ではこれを「身体的攻撃」に統一して表記する。

本研究の第2の目的は，わが国において関係性攻撃の研究は始まったばかりであることから，幼児の関係性攻撃の実態を把握することである。

方　法

評定者と対象児

宮崎県内の9つの幼稚園及び保育所に所属する保育者18名に，担当クラスの幼児の行動評定を依頼した。対象児は，年中児161名と年長児202名の計363名であった。回答に不備のある者1名を除き，年中児160名（男児90名，女児70名；平均年齢5歳4ヶ月）と年長児202名（男児98名，女児104名；平均年齢6歳4ヶ月）の計362名を分析の対象とした。

測定尺度

関係性攻撃と身体的攻撃の尺度　Crick et al.（1997）のPreschool Social Behavior Scale-Teacher Formを翻訳した尺度を用いた。この尺度は，関係性攻撃，身体的攻撃，向社会的行動の3つの下位尺度から構成されているが，向社会的行動下位尺度は次の幼児版教師評定社会的スキル尺度と内容が重複するため使用しなかった。また，関係性攻撃下位尺度の1項目「言うことを聞かないと誕生日会に呼んであげないと仲間にいう」は，保育者と協議の結果，幼児の実状と合わないことから除外した。したがって本研究では，関係性攻撃（5項目）と身体的攻撃（6項目）の2つの下位尺度を用いた（資料1参照）。回答は，各項目について「全くあてはまらない(1点)」「あまりあてはまらない(2点)」「少しあてはまる（3点)」「わりにあてはまる（4点)」「非常にあてはまる(5点)」の5段階評定で求めた。各下位尺度についてα係数を算出したところ，関係性攻撃が$\alpha=.94$，身体的攻撃が$\alpha=.92$であり，十分な信頼性が認められた。なお，両下位尺度の項目数は異なるため，各下位尺度の平均評定値をそれぞれの下位尺度得点として使用した。

社会的スキルの尺度　渡邊ら（1999）によって標準化された幼児版教師評定社会的スキル尺度より，社会的スキル領域4下位尺度25項目（自己コントロールスキル5項目，協調スキル5項目，社会的働きかけスキル8項目，教室活動スキル7項目）を用いた（TABLE 4参照）。回答は，各項目について「全くみられない(1点)」「少しみられる(2点)」「ときどきみられる(3点)」「よくみられる(4点)」「非常によくみられる（5点)」の5段階評定で求めた。

調査の時期と方法

2000年1月から2月に質問紙を配布し，保育者はその間の約1週間で質問紙に回答した。その際，保育者

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

に対しては，「過去１～２ヶ月間の観察に基づいて，それぞれの子どもの行動について評定して下さい」と教示した。

結　　果

攻撃行動の実態

各攻撃得点の分布　TABLE 1 は，各攻撃得点の分布をクロス集計表にしたものである。身体的攻撃得点が「３点以上」に該当する子どもの割合は，男児で17.0%（32人），女児で9.8%（17人）であった。これに対して，関係性攻撃得点が「３点以上」に該当する子どもの割合は，男児で19.7%（37人），女児で20.7%（36人）であり，身体的攻撃を高く示す子どもの割合と同程度かあるいはそれ以上に高いことが分かる。

各攻撃得点の性差と年齢差　TABLE 2 は，各攻撃得点の平均値，標準偏差及び中央値を性別に示したものである。各攻撃得点はいずれも低い得点に偏り正規分布をしていなかったので，Mann-Whitney の U 検定により，性差と年齢差を検討した。その結果，関係性攻撃では，有意な性差は見られなかった。一方，身体的攻撃では有意な性差が見られ，男児が女児よりも高かった（$U=10731.0, p<.001$）。また，いずれの攻撃についても有意な年齢差は見られなかった。

TABLE 1　関係性攻撃得点と身体的攻撃得点のクロス集計表

	身体的攻撃得点			
	1～2点未満	2～3点未満	3点以上	計
		男		
関係性攻撃得点				
1～2点未満	95(50.5)	13(6.9)	2(1.1)	110(58.5)
2～3点未満	16(8.5)	21(11.2)	4(2.1)	41(21.8)
3点以上	1(0.5)	10(5.3)	26(13.8)	37(19.7)
計	112(59.5)	44(23.4)	32(17.0)	188(100.0)
		女		
関係性攻撃得点				
1～2点未満	109(62.6)	0(0.0)	0(0.0)	109(62.6)
2～3点未満	21(12.1)	8(4.6)	0(0.0)	29(16.7)
3点以上	7(4.0)	12(6.9)	17(9.8)	36(20.7)
計	137(78.7)	20(11.5)	17(9.8)	174(100.0)

注）表中の数値は人数，括弧内は%を示す。

TABLE 2　各攻撃得点の平均値（M），標準偏差（SD）及び中央値（Me）

		男	女	全体
関係性攻撃	M	1.91	1.90	1.91
	SD	0.96	0.97	0.96
	Me	1.60	1.60	1.60
身体的攻撃	M	1.98	1.54	1.77
	SD	0.92	0.71	0.85
	Me	1.67	1.17	1.50

攻撃児の選出

関係性攻撃を顕著に示す子どもの行動特徴を検討するのに先立ち，Crick et al.（1997）の分類方法を参考にし，攻撃児の選出を行った。TABLE 1 のクロス集計表に基づいて，以下のような４群を選出した。関係性攻撃群（関係性攻撃得点が「3点以上」，身体的攻撃得点が「1～2点未満」と「2～3点未満」，以下 RH 群）。両高群（関係性攻撃得点と身体的攻撃得点がともに「3点以上」，以下 BH 群）。両低群（身体的攻撃得点と関係性攻撃得点がともに「1～2点未満」，以下 BL 群）。身体的攻撃群（身体的攻撃得点が「3点以上」，関係性攻撃得点が「1～2点未満」と「2～3点未満」，以下 PH 群）。その結果，各群の男女別の人数構成は TABLE 3 に示す通りとなった。χ^2 検定の結果，男女の偏りが有意であり（$\chi^2_{(3)}=10.81, p<.05$），PH 群には男児が有意に多く（$p<.05$），BH 群には男児が有意に多い傾向が見られた。年齢比についても χ^2 検定を行ったが，有意な年齢差は認められなかった。なお，PH 群は人数が少ないため，以下の分析では除外した。

RH 群の社会的スキルの特徴に関する検討

項目別の群間比較　TABLE 4 は，社会的スキルの各項目得点の平均値と標準偏差を群別，性別に示したものである。各項目別に，３（群）×２（性別）の２要因の分散分析を行った[4]。分散分析後の多重比較には，全て Ryan 法（$p<.05$）を使用した。

その結果，TABLE 4 に示すように，25項目中の16項目で群の有意な（傾向も含めて）主効果が示された。その16項目中，RH 群と他群との間で有意な差が認められたのは12項目であった。RH 群は，「15．言われなくても教師の手伝いをする」で BL 群よりも高い得点を示

TABLE 3　各群の男女別の人数内訳

	RH 群	BH 群	BL 群	PH 群
男	11(3.0)	26(7.2)	95(26.2)	6(1.7)
女	19(5.2)	17(4.7)	109(30.1)	0(0.0)
計	30(8.2)	43(11.9)	204(56.3)	6(1.7)

注１）RH 群は関係性攻撃群，BH 群は両高群，BL 群は両低群，PH 群は身体的攻撃群を表す。
注２）（　）内は全対象児362名を分母とした割合（%）である。

[4]　年齢要因を除外した根拠は，以下の通りである。社会的スキルの下位尺度得点ごとに，3（攻撃児群）×２（年齢：年中児，年長児）の分散分析を行った。その結果，主張性スキルに有意な群の主効果，その他のスキルに有意な群と年齢の有意な主効果が認められたが，交互作用は有意でなかった。よって，いずれの社会的スキルについても群によって発達の影響が異なることはないと言える。先行研究において攻撃と適応の関連のパターンが男女で異なっていることが明らかにされているため（例えば，Crick & Grotpeter, 1995），本研究では，年齢要因を含めることによってセルサイズを小さくするよりも，年齢要因を除外して性別要因を含めることにした。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 4 社会的スキルの項目得点の群別，性別の平均値（*SD*）及び分散分析結果

No.	項目内容	RH群		BH群		BL群		分散分析			
		男	女	男	女	男	女	群	性別	交互作用	多重比較
規律性スキル											
1	教師の指示に従う	3.91 (0.67)	3.63 (0.74)	3.58 (0.97)	3.71 (0.57)	4.17 (0.74)	4.44 (0.70)	10.33***	0.11	1.70	RH, BH＜BL
2	仲間とのいざこざ場面で，自分の気持ちをコントロールする	2.91 (0.90)	2.90 (0.45)	2.31 (0.82)	2.77 (0.55)	3.22 (0.90)	3.69 (0.80)	14.74***	4.75*	1.30	RH, BH＜BL 男＜女
3	人とゲームしているときにルールに従う	3.46 (0.89)	3.42 (0.88)	3.23 (1.19)	3.41 (0.69)	3.97 (0.90)	4.38 (0.65)	13.94***	1.68	0.80	RH, BH＜BL
4	園にある遊具や教材を片付ける	3.91 (0.51)	3.16 (0.81)	3.35 (1.04)	3.12 (0.58)	3.68 (0.92)	3.89 (0.77)	4.96**	3.21†	3.69*	男：RH, BL＞BH† 女：RH, BH＜BL RH：男＞女
5	批判されても気分を害さないで気持ちよくそれを受ける	2.55 (0.78)	2.42 (0.67)	2.15 (1.03)	2.18 (0.51)	2.96 (0.77)	3.02 (0.81)	12.28***	0.01	0.17	RH, BH＜BL
6	ゲームなどの活動中に，自分の順番を待つことができる	3.91 (0.90)	3.63 (0.87)	3.39 (1.18)	3.47 (0.78)	4.04 (0.96)	4.56 (0.68)	11.60***	0.53	2.37†	RH, BH＜BL
7	大人とのいざこざ場面で，自分の気持ちをコントロールする	3.73 (0.75)	3.41 (0.88)	3.12 (1.25)	3.06 (0.87)	3.04 (1.13)	3.25 (1.17)	2.57†	0.08	0.59	RH＞BH, BL†
友情形成スキル											
8	友達をいろいろな活動に誘う	4.36 (0.98)	3.90 (0.79)	4.35 (0.73)	4.59 (0.60)	3.21 (0.96)	3.49 (0.96)	17.77***	0.01	2.39†	RH, BH＞BL
9	自分から仲間との会話を仕掛ける	4.64 (0.64)	4.32 (0.73)	4.50 (0.84)	4.77 (0.42)	3.71 (0.89)	3.77 (0.95)	13.62***	0.00	1.32	RH, BH＞BL
10	ゲームや集団活動に参加する	4.46 (0.66)	3.79 (1.10)	4.08 (0.87)	4.35 (0.76)	3.79 (0.92)	3.91 (0.81)	2.17	0.36	3.80*	男：RH＞BL 女：RH, BL＜BH† RH：男＞女
11	教室での活動に自分から進んで仲間の手伝いをする	3.73 (1.14)	3.47 (0.68)	3.65 (0.96)	3.41 (0.49)	3.00 (1.03)	3.40 (0.92)	2.34†	0.04	1.82	RH, BH＞BL
12	自由時間の過ごし方が適切である	4.27 (0.62)	3.58 (0.75)	4.00 (0.88)	4.12 (0.68)	3.75 (0.98)	4.14 (0.81)	0.32	0.18	4.83**	女：RH＜BL, RH＜BH† RH：男＞女
主張性スキル											
13	適切な場面で自分のよいところを言える	2.73 (1.05)	3.26 (0.55)	3.35 (0.83)	3.29 (0.82)	2.06 (0.89)	2.28 (1.08)	17.54***	2.01	1.08	RH, BH＞BL
14	指示しなくても初めて会う人に自分から自己紹介する	3.18 (1.40)	2.47 (1.19)	3.23 (1.25)	3.35 (1.14)	1.77 (1.00)	1.92 (1.18)	19.09***	0.56	2.07	RH, BH＞BL
15	言われなくても教師の手伝いをする	3.73 (1.21)	3.68 (0.86)	3.54 (0.93)	3.29 (0.57)	2.84 (1.07)	3.34 (1.19)	3.68*	0.14	1.43	RH＞BL
16	仲間に意地悪されても適切に応答する	3.64 (0.77)	3.05 (0.69)	2.96 (1.22)	3.41 (0.84)	2.82 (0.92)	3.11 (1.14)	1.56	0.09	3.34*	男：RH＞BL RH：男＞女†
RH群と他群との間で有意差の示されなかった項目											
17	簡単に友達を作る	3.36 (0.77)	3.11 (0.64)	3.62 (0.79)	3.35 (0.68)	3.27 (0.89)	3.41 (0.89)	0.98	0.76	0.83	
18	不公平なルールには適切なやり方で疑問を唱える	3.73 (1.05)	3.21 (0.61)	3.35 (1.30)	3.65 (0.59)	2.95 (1.08)	3.39 (1.33)	1.09	0.15	2.26	
19	指示しなくても，遊びや活動の集団に加わる	4.09 (1.00)	3.68 (1.17)	4.23 (0.97)	4.29 (0.79)	3.51 (0.99)	3.83 (0.92)	4.43*	0.00	1.65	BH＞BL
20	不公平な扱いを受けたと感じたら，教師にそのことをうまく話す	3.64 (0.64)	3.37 (0.74)	3.54 (1.08)	3.53 (0.85)	3.23 (0.98)	3.57 (0.97)	0.24	0.02	1.15	
21	仲間をほめる	3.36 (0.88)	3.21 (0.61)	3.04 (0.94)	3.18 (0.51)	2.75 (1.07)	3.06 (1.07)	1.69	0.32	0.62	
22	仲間からほめられたり，認められたりする	3.09 (0.90)	2.79 (0.83)	3.00 (1.11)	3.12 (0.76)	3.13 (0.90)	3.36 (0.95)	1.21	0.01	1.03	
23	仲間と対立したときには，自分の考えを変えて折り合いをつける	3.00 (1.04)	2.95 (0.51)	2.50 (1.15)	2.47 (0.70)	3.05 (0.88)	3.43 (0.81)	9.04***	0.45	0.90	BH＜BL
24	仲間からいやなことを言われても，適切に対応する	3.00 (1.04)	2.84 (0.81)	2.42 (1.12)	2.59 (0.77)	2.99 (0.86)	3.32 (0.78)	6.63***	0.59	0.95	BH＜BL
25	園での活動をきちんと行う	4.27 (0.62)	3.95 (1.05)	4.00 (0.96)	3.77 (0.64)	4.33 (0.99)	4.56 (0.80)	4.55*	0.51	1.29	BH＜BL

†p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

注1）BL群は両低群，RH群は関係性攻撃群，BH群は両高群を表す。

注2）渡邊ら（1999）の下位尺度では，「社会的働きかけスキル」はNo.8, 9, 10, 12, 14, 16, 17, 18,「教室活動スキル」はNo.11, 13, 15, 19, 20, 21, 22,「自己コントロールスキル」はNo.2, 5, 7, 23, 24,「協調スキル」はNo.1, 3, 4, 6, 25である。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

し，「7．大人とのいざこざ場面で，自分の気持ちをコントロールする」で他の2群よりも高い得点を示した。また，RH群とBH群は，BL群に比べて「8．友達をいろいろな活動に誘う」，「9．自分から仲間との会話を仕掛ける」などの5項目で高い得点を示したが，「1．教師の指示に従う」，「2．仲間とのいざこざ場面で，自分の気持ちをコントロールする」などの5項目で低い得点を示した。RH群を除く他の2つの群間で有意な差が認められたのは4項目であった。BH群がBL群に比べ「23．仲間と対立したときには，自分の考えを変えて折り合いをつける」などの3項目で低い得点を示したが，「19．指示しなくても，遊びや活動の集団に加わる」で高い得点を示した。

次に，群と性別の有意な交互作用は4項目で認められ，いずれもRH群と他群との間に有意差が示された。「16．仲間に意地悪されても適切に応答する」では，男児においてRH群がBL群よりも高い得点を示し，RH群において男児が女児よりも高い得点を示した。また「4．園にある遊具や教材を片付ける」では，男児においてRH群とBL群がBH群よりも高い得点を示したが，女児においてはRH群とBH群がBL群よりも低い得点を示した。「10．ゲームや集団活動に参加する」では，男児においてRH群がBL群よりも高い得点を示したが，女児においてはRH群とBL群がBH群よりも低い得点を示した。さらに「12．自由時間の過ごし方が適切である」では，女児においてRH群が他の2群よりも低い得点を示した。

因子分析による検討　社会的スキルの項目別分析の結果，RH群と他群とを明確に識別する特徴の項目は16項目であった。そこで，これら16項目に基づいて因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行い，RH群の社会的スキルの下位尺度を構成することにした。その結果，TABLE 5に示す3因子が抽出された。因子間相関は，第1因子と第2因子で$r=.36$，第1因子と第3因子で$r=.20$，第2因子と第3因子で$r=.50$であった。また，各因子のα係数は，第1因子が$\alpha=.84$，第2因子が$\alpha=.83$，第3因子が$\alpha=.75$であり，比較的高い内的一貫性が確認された。そこで各因子について，それぞれの項目内容から「規律性スキル」，「友情形成スキル」，「主張性スキル」と命名した。これら3つの因子の項目数が異なることを考慮して，各因子の平均評定値をそれぞれの下位尺度得点として用いることにした。

攻撃行動と社会的スキルの相関　攻撃得点と社会的スキルの下位尺度得点の相関係数を算出した。結果は，TABLE 6に示す通りである。男女に共通して，いずれの攻撃行動も規律性スキルとの間に負の相関を，友情形成スキル及び主張性スキルとの間に正の相関を示した。

TABLE 5　社会的スキル尺度の因子分析結果（プロマックス回転）

No.	F1	F2	F3	共通性
1	.82	-.23	.21	.56
2	.81	.03	-.02	.67
3	.65	.23	-.34	.71
4	.64	.14	.06	.50
5	.62	-.23	.03	.31
6	.58	.29	-.29	.64
7	.55	-.10	.36	.35
8	-.27	.86	.21	.75
9	-.20	.85	.10	.68
10	.14	.65	.03	.51
11	.06	.57	.19	.45
12	.25	.54	-.13	.45
13	-.03	.15	.75	.64
14	-.08	.08	.74	.59
15	.22	.34	.48	.52
16	.46	.03	.47	.42
寄与率	30.5	16.6	7.5	

注）TABLE 4の項目番号と同一である。

下位尺度の群間比較　FIGURE 1〜3は，社会的スキルの下位尺度得点を群別，性別に図示したものである。社会的スキルの各下位尺度得点について3（群）×2（性別）の2要因分散分析を行った。その結果，「規律性スキル」では，群の主効果が有意となり［$F_{(2,271)}=14.93$，$p<.001$］，RH群（$M=3.35$, $SD=0.54$）とBH群（$M=3.06$, $SD=0.71$）が，BL群（$M=3.74$, $SD=0.60$）よりも有意に低かった。交互作用が有意傾向であったので［$F_{(2,271)}=2.57$，$p=.08$］，念のため，単純主効果の検定を行った。その結果，性の単純主効果は，BL群において女児が男児よりも有意に高い傾向を示した［$F_{(1,271)}=3.02$，$p=.08$］。群の単純主効果は，男児と女児のそれぞれにおいて有意であり［男児：$F_{(2,271)}=5.90$，$p<.005$；女児：$F_{(2,271)}=11.60$，$p<.001$］，男児ではBH群（$M=3.02$, $SD=0.83$）が，BL群（$M=3.58$, $SD=$

TABLE 6　攻撃行動と社会的スキルの相関分析結果

		男 $n=188$	女 $n=174$	全体 $n=362$
関係性攻撃	規律性スキル	-.21**	-.48***	-.32***
	友情形成スキル	.35***	.20**	.28***
	主張性スキル	.40***	.29***	.35***
身体的攻撃	規律性スキル	-.44***	-.52***	-.49***
	友情形成スキル	.15*	.20**	.14**
	主張性スキル	.27***	.27***	.23***

*$p<.05$，**$p<.01$，***$p<.001$

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

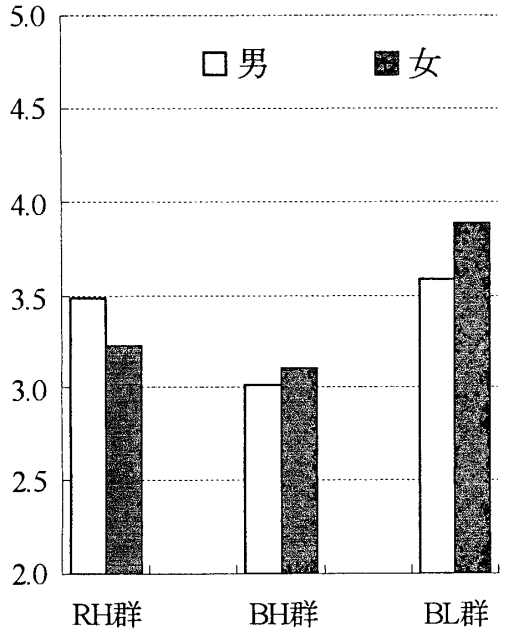

FIGURE 1 規律性スキル尺度得点
注）RH群は関係性攻撃群，BH群は両高群，BL群は両低群を表す。

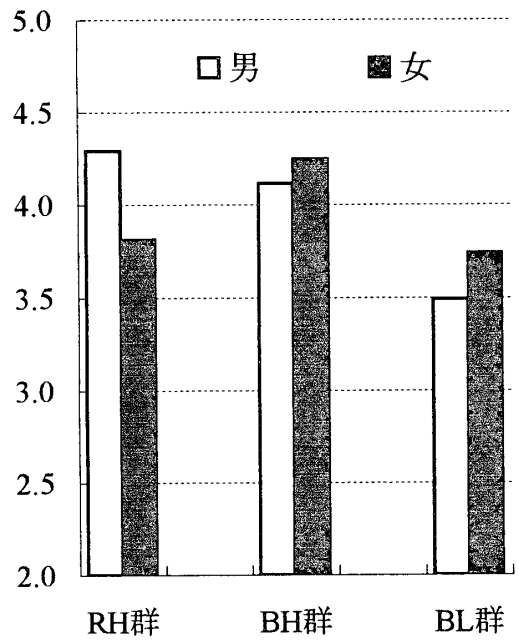

FIGURE 2 友情形成スキル尺度得点
注）RH群は関係性攻撃群，BH群は両高群，BL群は両低群を表す。

0.60）とRH群（M=3.48, SD=0.59）よりも有意に低く，女児ではRH群（M=3.23, SD=0.47）とBH群（M=3.10, SD=0.44）が，BL群（M=3.88, SD=0.55）よりも有意に低かった。次に，「友情形成スキル」では群の主効果が有意となり［$F_{(2,271)}$=8.50，p<.001］，BH群（M=4.18, SD=0.54）とRH群（M=4.05, SD=0.66）がBL群（M=3.62, SD=0.73）よりも有意に高かった。交互作用も有意

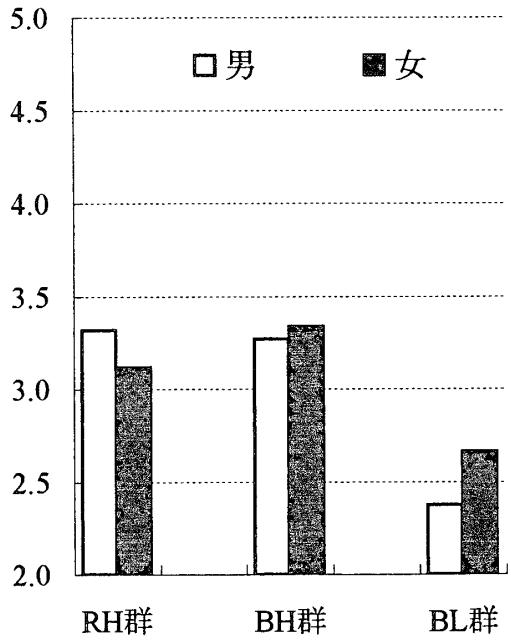

FIGURE 3 主張性スキル尺度得点
注）RH群は関係性攻撃群，BH群は両高群，BL群は両低群を表す。

であったため［$F_{(2,271)}$=3.73，p<.05］，単純主効果の検定を行った。その結果，群の単純主効果は，男児と女児のそれぞれにおいて有意となり［男児：$F_{(2,271)}$=8.59，p<.001；女児：$F_{(2,271)}$=3.65，p<.05］，男児ではRH群（M=4.29, SD=0.59）とBH群（M=4.12, SD=0.60）がBL群（M=3.49, SD=0.76）よりも有意に高く，女児ではBH群（M=4.25, SD=0.40）がRH群（M=3.81, SD=0.61）とBL群（M=3.74, SD=0.68）よりも有意に高かった。性の単純主効果は，RH群において男児が女児よりも有意に高かった［$F_{(1,271)}$=5.60，p<.05］。「主張性スキル」では，群の主効果が有意となり［$F_{(2,271)}$=13.81，p<.001］，BH群（M=3.30, SD=0.65）とRH群（M=3.22, SD=0.78）がBL群（M=2.52, SD=0.82）より有意に高かった。

考　　察

幼児の関係性攻撃の実態

本研究では，まず幼児において関係性攻撃がどの程度見られる攻撃行動なのかを，身体的攻撃との比較から検討した。その結果，関係性攻撃得点が「3点以上」に該当する子どもの割合は，男児で19.7%，女児で20.7%であり，身体的攻撃得点が「3点以上」に該当する子どもの割合と同程度かあるいはそれ以上に高かった。また，各群の人数比を見ると（TABLE 3），関係性攻撃の高いRH群は全体の8.3%，関係性攻撃と身体的攻撃の両方とも顕著なBH群は全体の11.9%を

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

占めるのに対し，身体的攻撃の高いPH群は全体の1.7%と非常に少なかった。これらの結果から，幼児集団の中には関係性攻撃を高く示す子どもがかなりの高い割合で存在していることが推察される。これまで子どもの攻撃研究は，身体的攻撃のような直接的で目立ちやすい形態の攻撃行動を取り上げることが多かった(Coie & Dodge, 1998 ; Crick & Grotpeter, 1995)。本研究の結果は，身体的攻撃だけでなく，関係性攻撃という観察されにくい形態の攻撃行動もすでに幼児期からかなり多く見られることを示している。幼児の攻撃行動に関する今後の研究では，身体的攻撃に加えて，関係性攻撃についても検討していく必要があるだろう。

性差について見てみると，身体的攻撃では男児が女児よりも高いのに対し，関係性攻撃では有意な性差が見出されなかった。また，RH群の男女の人数内訳を見ると(TABLE 3)，統計的な有意差は示されなかったものの，30人中女児が19人を占めていた。これらの結果は，女児の攻撃性を理解するうえで関係性攻撃が重要な概念であることを主張する研究（Crick et al., 1997 ; Crick & Grotpeter, 1995など）を大筋では支持するものであった。

RH群の社会的スキルの特徴

社会的スキルの下位尺度得点に関する結果をみると，RH群はBL群に比べ，規律性スキルが低く[5]，友情形成スキルと主張性スキルが同程度かあるいはそれ以上に高かった。しかもこのようなRH群の得点傾向はBH群と類似していた。ここから，関係性攻撃を高く示す幼児は，概して，規律性スキルに欠けるが，友情形成スキルや主張性スキルは比較的優れていると考えられる。参考までに，該当者が少なかったため分析から除外したPH群の社会的スキル下位尺度の平均値をそれぞれ算出してみると，いずれの得点も極めて低い[6]。以上の結果から，身体的攻撃を主要な攻撃手段としているPH群は社会的スキル全般に欠ける子どもであるのに対し，関係性攻撃を行うRH群やBH群は，規律性スキル以外では比較的優れたスキルを持つ子どもであると言える。

それでは，このような違いはどのように説明できるであろうか。これには身体的攻撃と関係性攻撃の質の違いが関わっていると思われる。すなわち，身体的攻撃は相手の身体を傷つける攻撃であり，極端に言えば，見ず知らずの相手に対しても向けることのできる攻撃である。それに対し，関係性攻撃は仲間関係を操作することによって相手に危害を加える攻撃であり，操作の対象となる仲間関係が存在していることが前提となる。例えば，「もう遊んであげないよ」という発言が攻撃となり得るのは，言った子どもと言われた子どもとの間に「一緒に遊ぶ友達」という前提があるためであろう。また，ある子どもを仲間はずれにしようとしても，それに賛同する友達がいなければ実行は不可能である。つまり，関係性攻撃を行うには，仲間関係を成立させるだけの社会的スキルを有していることが必要条件になるのであろう。

ところで，友情形成スキルでは有意な交互作用が見られ，RH群の仲間関係のあり方が男女で異なる可能性を示唆する興味深い結果が得られた。すなわち，RH群男児の友情形成スキル尺度得点及び各項目得点は，総じてBH群男児と差を示さず，BL群男児より高かった。このことから，RH群男児は仲間と友好的関係を築き，それを維持していることがうかがえる。これに対して女児の場合，RH群女児の友情形成スキル尺度得点は，BL群女児と差を示さず，BH群女児より低かった。このことは一見すると，RH群女児よりもBH群女児の方が友情形成スキルを用いていることを示すように思われる。しかし項目レベルで検討してみると，RH群女児は「8．友達を活動に誘う」「9．仲間との会話を仕掛ける」「11．仲間を手伝う」ことに関してはBH群女児と差がなく，BL群女児よりも多かった。ところが，「10．ゲームや集団活動に参加する」ことはBH群女児より少なく，有意差こそ見られないがBL群女児に比べても少なかった。さらに，「12．自由時間の過ごし方が適切である」では他の2群よりも低かった。このように，友達に対して極めて積極的に働きかける一方で，ゲームや集団活動への参加が少なく，自由時間の過ごし方が適切ではないという特徴を総合すると，RH群女児は特定の子どもとのみ関わりを持っている可能性が示唆される。

Grotpeter & Crick（1996）によると，関係性攻撃を示す児童の仲間関係は親密であると同時に排他的なものであるという。また，わが国でも「集団いじめ」との関連において，小学校高学年（三島, 1997）や中学・高校（菅, 1994）の女子は排他性の高い「仲良しグループ」を形成しやすいことが報告されている。本研究の結果は，こうした年長の女子に見られる「仲良しグループ」の特徴がすでにRH群女児に認められることを示唆

[5] 規律性スキルでは交互作用傾向が見られ，RH群男児とBL群男児の間に有意差は見出されなかった。しかし項目レベルでみると，ほとんどの項目で群の主効果が認められ，RH群は男女を問わずBL群よりも有意に低かった（cf. TABLE 4）。

[6] PH群の社会的スキルの下位尺度得点は，規律性スキル（M＝2.26, SD＝0.67），友情形成スキル（M＝2.53, SD＝1.24），主張性スキル（M＝2.33, SD＝1.14）であった。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

しているのかもしれない。もしそうであるならば，RH群女児は発達レベルの高い幼児たちであるということになる。しかし，これについてはあくまで推論の域を超えておらず，RH群の仲間関係のあり方やその性差を発達的に実証する研究が必要である。

本研究で得られたもう1つの興味深い結果は，RH群が，男女を問わず，教師をはじめとした大人に対するスキルにおいてネガティブとポジティブの両側面を示したことである。すなわちRH群は，「1．教師の指示に従う」ことがBH群と同様にBL群よりも低い反面，「15．教師の手伝い」をすることはBL群よりも多く，「7．大人とのいざこざ場面における自己コントロール」は他の2群より優れている傾向を示した。ここから，RH群は大人の顔色を見て行動するようなところがあると思われる。こうしたRH群の特徴が，大人から見つかりやすい身体的攻撃を避け，比較的見えにくい関係性攻撃を用いるという関係性攻撃群の攻撃形態と関連しているのであろう。この点に関しては，今後，詳細に検討する必要性がある。

以上の結果から，幼児の関係性攻撃の低減には規律性スキルの習得に焦点を当てた社会的スキル訓練が効果的であると指摘できる。また，関係性攻撃を顕著に示す女児に対しては，遊びや集団活動に参加するために必要なスキルを並行して指導することも有効であると言えよう。

最後に，本研究の問題点を述べる。本研究では，関係性攻撃を顕著に示す幼児の社会的スキルの特徴を明らかにするために，教師評定を使用した。しかし，一人の教師が平均して約20名の幼児の行動評定を行うことで，分析結果に評定者のバイアスが入り込んでいる可能性も考えられる。したがって，今後は，行動観察等の手法を併用して本研究の結果の一般性を確認していく必要がある。

引用文献

Cairns, R.B., Cairns, B.D., Neckerman, H.J., Ferguson, L.L., & Gariépy, J. 1989 Growth and aggression : 1. Childhood to early adolescence. *Developmental Psychology*, **25**, 320-330.

Coie, J.D., & Dodge, K.A. 1998 Aggression and antisocial behavior. In N. Eisenberg (Ed.), *Handbook of child psychology*. New York : Wiley. Pp.779-862.

Coie, J.D., Dodge, K.A., & Kupersmidt, J.B. 1990 Peer group behavior and social status. In S.R. Asher, & J.D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. New York : Cambridge University Press. Pp.17-59. (山崎 晃・中澤 潤(監訳) 1996 子どもと仲間の心理学―友だちを拒否するこころ― 北大路書房 Pp.14-62.)

Crick, N.R. 1997 Engagement in gender normative versus nonnormative forms of aggression : Links to social-psychological adjustment. *Developmental Psychology*, **33**, 610-617.

Crick, N.R., Casas, J.F., & Mosher, M. 1997 Relational and overt aggression in preschool. *Developmental Psychology*, **33**, 579-588.

Crick, N.R., & Grotpeter, J.K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.

Feshbach, N. 1969 Sex differences in children's modes of aggressive responses toward outsiders. *Merrill Palmer Quarterly*, **15**, 249-258.

Galen, B.R., & Underwood, M.K. 1997 A developmental investigation of social aggression among children. *Developmental Psychology*, **33**, 589-600.

Grotpeter, J.K., & Crick, N.R. 1996 Relational aggression, overt aggression, and friendship. *Child Development*, **67**, 2328-2338.

Lagerspetz, K.M.J., Björkqvist, K., & Peltonen, T. 1988 Is indirect aggression typical of females? Gender differences in aggressiveness in 11- to 12-year-old children. *Aggressive Behavior*, **14**, 403-414.

三島浩路 1997 対人関係能力の低下といじめ 名古屋大学教育学部紀要(心理学), **44**, 1-32.

佐藤容子・佐藤正二・高山 巌 1993 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練―コーチング法の使用と訓練の般化性― 行動療法研究, **19**(1), 13-27.

菅佐和子 1994 女の子から女性へ―思春期 岡本祐子・松下美和子(編) 女性のためのライフサイクル心理学 福村出版

渡邊朋子・岡安孝弘・佐藤正二 1999 幼児用社会的スキル尺度の標準化に関する研究 日本行動療法学会第25回大会発表論文集, 104-105.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

謝　辞

本論文は宮崎大学大学院教育学研究科に提出した修士論文（2000年度）の一部に加筆・修正したものです。本論文の作成にあたり，広島大学前田健一先生，宮崎大学岡安孝弘先生，宮崎大学佐藤容子先生にご指導・ご助言を賜りました。心より御礼申し上げます。そして，手間のかかる調査にご協力頂いた幼稚園・保育所の諸先生方に感謝の意を表します。

（2001.3.28 受稿，'02.11.16 受理）

資料　関係性攻撃と身体的攻撃の項目

＜関係性攻撃＞1．他の子に「○○ちゃんと遊ばないように」とか「○○ちゃんと友達にならないように」という，2．「私／僕の言うことを聞かないと仲間はずれにしてやる」と言葉で脅す，3．他の子たちにある子を嫌いにならせる，4．仲間に「あなたとは遊ばない」とか「私／僕の言うとおりにすればあなたと友達になってあげる」という，5．ある子に腹を立てるとその子を仲間はずれにする。

＜身体的攻撃＞1．自分の欲しいものを手に入れるために「身体的に危害を加えてやる」と言葉で仲間を脅す，2．他の子を突いたり押したりする，3．他の子を蹴ったり叩いたりする，4．取り乱したときに他の子の物を壊す，5．他の子をつねって傷つける，6．「叩くよ」とか「やっつけてやる」などと言葉で仲間を脅す。

Relational Aggression and Social Skills of Preschool Children

Miyoshi Isobe (Graduate School of Education, Hiroshima University) and Shoji Sato (Miyazaki University)

Japanese Journal of Educational Psychology, 2003, 51, 13—21

The main purpose of the present study was to investigate the social skills of relationally aggressive preschoolers. Aggression (relational aggression and physical aggression) and social skills (self-control skills, friendship-making skills, and assertion skills) of 362 preschoolers were assessed by using teacher-rating measures. On the basis of teachers' assessments of aggression, 4 groups (relationally aggressive, physically aggressive, relationally and physically aggressive, and non-aggressive) were identified. The main results were as follows : (1) Compared to non-aggressive children, relationally aggressive children and relationally and physically aggressive children were reported to have significantly lower levels of self-control skills. However, their teachers rated them as showing relatively higher levels on the other social skills measured (friendship-making and assertion skills). (2) Children identified from the ratings as relationally aggressive were also reported to have higher levels of social skills toward their teachers. (3) Relationally aggressive girls, but not boys, showed partial deficiency in friendship-making skills. It was suggested that, in order to be effective, a social skills training program for relationally aggressive children should emphasize self-control skills.

Key Words : relational aggression, social skills, preschoolers

NII-Electronic Library Service